**食べるを支える、食べられないを支える**

日本歯科大学教授

口腔リハビリテーション多摩クリニック院長　菊谷　武

「食べることは生きること」という言葉をよく耳にします。なぜならば、食べないことは死を意味することだからです。ただし、この「生きる」という言葉が、単に生物学的な生命を表しているだけではなく、その人の人生であったりや、生活であったりするなどの意味を含んでいる言葉であることは、言うまでもありません。だからこそ、どんな状況になっても、食べることはその人間の尊厳を守り、その人を取り巻く人すべて人の喜びにつながります。

「最後まで食べた」という記憶は、残された家族に良い思い出として残り続けます。この記憶は、看取った後に訪れる悲しみを和らげます。一方で、なぜ、食べてはいけられなかったのか、他に方法はなかったのか、といった思いが残ったまま看取ってしまった場合には、悲しみの和らぎを妨げますや後悔が残ります。

年を重ねるとあらゆる機能が徐々に低下していき終末期を迎えます。今日より明日、今月より来月、今年より来年、この傾きのなかで、できることが少なくなってくるはずです。すなわち、徐々に食べられなくなることは、ある意味自然な流れであるということが理解できます。私たちが、人生の最終段階において食べる支援をするときは、この「傾き」に対する考慮が必要となってきます。神様は、人間の命を50歳までと見積もり設計したと言われています。それ以降の人生は、年を重ねるに伴って変化する機能を受け入れながら、さまざまな工夫をすることで、その生涯を過ごしているとも言えます。だからこそ、「傾き」に考慮した「工夫」が求められることになります。

確かに、人は食べないと死んでしまいます。しかし、死が近いから食べないのだと考えると違った世界が見えてきます。死を遠ざけるために、頑張って食べてもらう。頑張っても十分な栄養が摂れないときは経管栄養で補充する。こんな考えがこれまでの主流だったかもしれません。「傾き」を受け入れ、死が近いということを受け入れることができたら、無理のない範囲で、「食べられるだけ食べる」という考えも正解かもしれません。

人生の最終段階における「食べること」の支援は、達成感のある看取りへの手助けになるといえます。私たちはその支援者となり、人生の総仕上げに立ち会うことになるのです。